

## ジェルジ・リゲティ：《ル・グラン・マカーブル》におけるオペラ構想の変遷 佐藤仁美

ジェルジ・リゲティのオペラ、《ル・グラン・マカーブル》は、「アンチ・アンチ・オペラ」という概念を特徴とする特異なオペラとして、20世紀のオペラ史における重要な作品の一つに位置づけられてきた。この概念は、彼自身の1977年の発言に由来するもので、これまでの先行研究においても必ず言及されてきたが、この用語の定義は必ずしも明確ではない。本稿は、「アンチ・アンチ・オペラ」という概念の発展の過程を詳細に考察することによって、この概念の意義を再考することを目的としている。

まず本稿では、リゲティが「アンチ・アンチ・オペラ」を創作するに至った経緯を検証した。その結果、1965年、「アンチ・オペラ」作品として開始されたオペラ構想は、1971年にリゲティがカーゲルの《国立劇場》を見たことで転換期を迎えた、という新たな可能性が見出された。そして翌年の1972年、「擬似的本質」を特徴とするミシェル・ド・ゲルドロードの戯曲、『ラ・バラード・デュ・グラン・マカーブル』に出会ったことで、彼独自の概念である「アンチ・アンチ・オペラ」への発展の道は開かれたのである。

次に、ゲルドロードによるオペラの原作、ミヒャエル・メシュケによる未刊の台本2種(1973)、および出版されたスコアに記載されている台本2種(1978、1997)の比較・分析を行い、台本の変遷を詳細に検証することによって、オペラの構想が、1978年の初版スコアの完成に至るまで、さらなる変化を遂げていたことが実証された。つまり、リゲティは未刊の台本2種を通して試行錯誤を重ね、初版に至り、そのときようやく「アンチ・アンチ・オペラ」へと発展させる手法を見出したのである。その手法こそが「擬似的本質」によってもたらされる「多層性」である。さらに1997年の改訂版において、この「多層性」をさらに際立たせることによって、「アンチ・アンチ・オペラ」の概念はより確固たるものとなったのである。